



第 11 回

水路工事で人の道を説く ・川崎平右衛門

作家 童 門 冬 二

徳川時代には何度か大きなまでいう行財政改革があった。享保の改革・寛政の改革・天保の改革である。寛政の改革と天保の改革の推進者は、「模範にすべきは享保の改革である」

とあって、享保の改革をお手本にした。享保の改革の推進者は八代将軍徳川吉宗だ。そして、吉宗の考えを江戸の町で実際に実行したのが名町奉行といわれた、大岡越前守忠相である。町奉行の職責は今の東京都知事・警視総監・消防総監・東京地方裁判所の所長などの仕事をおこなうことだが、吉宗は大岡の力量を高く評価して、

「関東地方の米を増産せよ」

と命じた。吉宗が将軍になっていちばん気になったのが「日本の人口問題」であった。徳川家康が幕府を開いたときの日本の総人口は約千三百万人だったといわれる。この数字は現在の東京都の人口に相応する。そして明治維新が実現したとき(慶応三年)ごろの日本の人口は、三千三百万人ぐらいだったといわれる。したがって徳川時代約二七〇年間の人口増は約二千万人だった。吉宗のころもせいぜい二千万人かそれを超えるぐらいのものだったろう。吉宗はこのことを気にした。そこで部下に、

「なぜ日本の人口は横這いなのか?」ときいた。

部下は、

「農村で"間引き"をおこなっているからでございます」と答えた。間引きとはなにかときく吉宗に部下は、

- ・農村では圧倒的に食糧が不足している
- ・米はほとんど年貢として納めてしまうからだ
- ・そこで農村では、赤ん坊が生まれても将来労働力にならないと思えば、人工的に調整してしまう
- ・つまり"間引き"である

吉宗は頭を抱えた。そして怒った。

「この世に生まれた生命は貴い。いかに将来労働力にならないとはいっても、人工的に調整するとはなにごとか」と怒った。が、その原因が「食料不足」であれば、その原因をまず潰すことが先決だ。そこで吉宗はまず自分の膝元である江戸近辺の農村で、いっせいに「米の増産」をおこなわせようと考えた。そのときに、江戸町奉行である大岡忠相を抜擢したのである。大岡にとってはあまりありがたい話ではない。それでなくても江戸の都市問題がいろいろと起こっているときに、関東地方の農村の管理まで任されたのではとてもかなわない。第一大岡自身、それほど農業に知識があるわけではない。しかし吉宗の命令であれば背くわけにはいかない。大岡は考えた。

かれは、

「餅は餅屋だ。農村のことは農民に任せよう」と思い、各地域の情報を集めて、「その地方で尊敬されている人物」を選び抜いた。そのひとりが川崎平右衛門だった。川崎平右衛門は、多摩川の流域に住む豪農で、農業の知識や技術にすぐれているだけでなく、人格もすぐれていた。村びとから

「名庄屋様」と敬愛されていた。そこで大岡は川崎を呼んだ。そして、

「実はこういうわけで、おぬしにわしの代わりを頼みたいのだ」

といった。川崎はびっくりした。こんなことはいままできいたことがない。しかも名奉行の噂の高い大岡忠相が、手をつけて、「わしの代わりに、米の増反の指揮をとってくれ」というのである。

びっくりしたが川崎平右衛門は感動した。そして、

(なるほど、大岡様が名奉行だといわれるのはこういうところがおありだからだ)

と、大岡の人格に傾倒した。大岡は吉宗に頼んで川崎平右衛門に「代官」という格式を与えた。

川崎平右衛門はすぐ米の増反のための工事をはじめた。荒地を開く・灌概用水を引く・灌概用水の水源を求める・工事には極力失業者を使用するなどの策をとった。失業者たちはよろこんだ。しかし川崎平右衛門は単にかれらを使っただけではない。失業者の中には無頼漢もいる。そこで川崎は、

「この機会に、工事を通じてかれらに人の道を説こう」

と考えた。人の道を説くといっても、毎朝集めて例会を開き説教するわけではない。面白い方法を考え出した。それは、

・各人に、札を渡す

・札には、人の道を説く仁・義・礼・智・信の五文字を一字ずつ入れる

・川崎が判断してどの札をだれに渡すかを定める

・一日働いて帰りには木の札を回収する。そのとき、仁・義・礼・智・信の別によって、賃金の額を調整する

・もちろん、仁がいちばん多く、信がいちばん少ない

そのために、働く者の中には疑問に思う者もいた。川崎のところにやってきて、

「なぜ、わたしは信の札なのですか?仁ぐらいの仕事はできますよ、札を換えてください」

という。川崎は笑ってこういう。

「たしかにおまえさんは仁だけど仕事ができる能力はある。しかしどうも毎日の生き方がまだ仁には及ばないね。信の札がやっただ。もっと賃金が欲しかったら、仁の札に値するようにおこないを改めなさい」

諭された働き手は頭をかいて、思わず恐縮してしまう。川崎にいわれたとおりの行状だったからである。

この方法によって工事はスムーズに進んだ。やがて米の増産の目途もついた。大岡は感動した。そしてこのことを吉宗に報告した。吉宗もよろこんで、川崎平右衛門を引見し、褒め言葉と褒美を与えた。